



第279号 2026年10月号

日本基督教団 梅ヶ丘教会会報

ぶどうの木

発行人 牧師 広田叔弘
企画編集 広報委員会
www.church.ne.jp/umegaoka/
2026年9月27日発行

〒155-0033
東京都世田谷区代田 3-37-7
TEL: 03-3414-5772
FAX: 03-3414-5778



『一緒に祈ろう!』

牧師 広田叔弘

彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた。

使徒言行録 1章14節

一九八一年三月のことです。その日、私は初めて礼拝をささげました。讃美歌は歌えませんが、説教は「日本語を話している」ことだけしか分かりませんでした。過剰に緊張していたのです。心は石のように固まっていた。礼拝が終わったので礼拝堂の席を立ちました。階段の方へ向かいました。すると、牧師が小走りでやってきました。私の手を取って言います。「礼拝はどうだった? 礼拝はどうだった?」。私は「キョトン」。何かとても喜んでくれているようなのですが、当時はその理由さえもわかりませんでした。まして、礼拝の感想を言うなどはとても出来ません。

「ん・・・。」と言う感じでした。すると牧師は言いました。「水曜日にもいいから祈ろう!」。この時でした。「ああ、教会は祈っていいところなのだ・・・。」そう思いました。そして心を覆い尽くしていた厚い雲の向こうから、かすかに光が差し込むように感じたのです。

これが、私の求道生活の始まりです。二十歳の時でした。この日から、主キリストの御名を覚えぬ日は一日もないのです。

キリスト信徒にとって祈りは日常的なものです。けれども、主に祈れること自体が奇跡的な恵みです。主と私が繋がっているから祈れます。主からの愛と招きを受け取っているから祈ることが出来るのです。

長く祈る必要はありません。義務のように捉えるのも違うでしょう。朝に晩に、感謝と願いをささげます。愛する者たちの幸のため、心が痛む現実のために祈る。自分の言葉で、今ある心の思いをささげることが出来れば、それで充分です。

冒頭に掲げた聖書箇所は、ペンテコステが起きる前の弟子たちの様子を告げています。一同心を合わせて熱心に祈っていました。しかし、これは易しいことではありません。女性の弟子たちは我が主の最期を看取りました。これに対して男の弟子たちは、全員姿を隠しました。逃げたのです。弟子たち一同は主を仰いで祈っています。信仰の強い者も弱い者も、限らない愛と赦しの中で受け入れ合っている。主を仰いで祈っているのです。

教会は神が興した祈りの家です。主を信じて祈りをささげ、厚い雲が立ち去る不思議が起こります。「さあ、皆で一緒に祈ろう!」。